

はじめに

「歴史は、時計の振り子のように行ったり来たりを繰り返す」という言葉を聞いたことがあります。学校教育の分野でも、昨年（平成二十年）公示された学習指導要領において、これまでの「ゆとり教育」の見直しと、「学力向上」へと方針転換がなされました。また、それに関連していると思われるが、授業成立またその効果の促進を支える土台として、道徳教育の充実、中でも規範意識の向上が前面に打ち立てられました。私は、以前著書の中で「教育を受けない俗に個性といわれるものは、実は野生でしかない。人間が人間として成長するためには、やはり人間としての教育が必要なのである」と書いたことがあります。個性と我儘の境界線が曖昧に感られる昨今、私はこの「規範意識の向上」という方針を支持しています。以下に、それを前提に私の専門分野である教育カウンセリング心理学（教育相談学）の視点から、「教育のゆくえ」私論を述べていきます。

教育カウンセリング心理学 （学校教育相談学）とは何か

教育カウンセリング心理学（学校教育相談学）とは、教育の視点から教師が使えるカウンセリングの考え方や手法

リレー連載

教育のゆくえ

学校教育相談のこれから に思う



稲垣 応顕

上越教育大学准教授

を開発する学問であるということです。したがって、その対象は精神疾患を有していない人々です。また、その中心となる理論背景は、カウンセリング心理学と教育学などです。そして、伝統的なカウンセリングと比べて、次の三つの大きな特徴を有しています

① 教育モデル（発達モデル）を採用する

これは、子どもや学級をはじめとする集団における悩みや問題（行動）に対して、原因を追究してそれを除去するのではなく、「だから、どうすればよいのか」という、先を考えるとという発想を意味します。例えば、保健室や相談室で一日を過ごす子どもが、教室に行かない（行けない）理由について「だって、教室に〇〇という嫌な人がいる」と言ったとします。この時点で、原因は分かっていたことになりません。しかし、我々にはその原因だと言われた子どもも、大切な存在であり教育の対象です。原因だと言われた子どもを教室から出すことは教育的（そもそも可能？）なのでしょう。もう一つ例をあげます。進路についての悩みは、ほぼ全ての子どもが有します。しかし、この問題についても、原因が進路選択・決定であると解っているにもかかわらず、それをスポイル（パス）することは、おそらくは不可能です。つまり、学校の中では、原因が分かっていたとしてもそれをなくすことが極めて難しい（不可能）ということが多いのではないのでしょうか。

原因の除去が難しいとなれば、我々（教師）が行うに適

しているのは、現状をしっかりと把握する（心理学の用語でいえば、アセスメント）ことだと思えます。次いで、教育カウンセリング心理学の発想では、それらの悩みや問題がどのようになればよいのかといったゴール地点を設定します。そして、現状からゴールまでどうしたら辿りつけるのかを、教師やカウンセラーが道筋を描いていきます。教師になじみの用語でいえば、指導計画を立てるということと重なるのでしょうか。

ちなみに、教育カウンセリング心理学では、論理療法の提唱者であるアルバート・エリスの考え方を支持します。少し長くなりますが、彼の言葉を引用します。「過去は、なくならない。過去は、変わらない。過去にこだわっても先には進めない。過去は乗り越えていくしかないのだ」、「過去は、それは現在のあなたに影響を及ぼしてはいるだろう。しかし、過去はあなたの将来を決定つけてはいない。あなたの将来を決めるのは、今現在のあなたである。今現在のあなたが、どのように考え、どのように振舞うか（行動するの）かによって、あなたの将来は決まってくるのである」です。いかがでしょうか。

② ガイダンス機能を有する

もちろん、教育カウンセリングはカウンセリングであることから、受容・共感を重視します。

このことについて、今思い出したことがあります。以前、民間の不登校サポート団体とタイアップし、「不登校経験

者による体験発表会」を催したことがあります。不登校を有する子ども達が何を支援と感じるのか、彼らを支援する有効な手立ては何か、を模索しようと試みたものでした。

その際、現在は三十歳を超え社会福祉系の公務員となっている男性が、次のような発表をしてくれました。……「僕が学校に行けていなかった頃、家にも居ずらくて、近所の公園で、一人で遊んでいた。秋だったと記憶している。夕方になって、風が冷たくなつて、雨が降ってきた。僕は、それでも家に帰れなくて、公園の木の陰で、その雨をずっと見ていた。母が、心配して探しに来てくれた。僕を見つけて駆け寄り、傘を差し出してくれた。そして、「寒いでしょ。濡れてるよ。こっちにおいで。お家に帰ろう。体を乾かそう」と声を掛けてくれた。(しばし、沈黙)しかし、僕はその傘に入ることが出来なかった。僕の足は、一歩も動き出せなかった」というのです。この男性の母親の言葉を繰り返してみます。「寒いでしょ。濡れてるよ。こっちにおいで。お家に帰ろう。体を乾かそう」……、彼はその後を次のように続けました。「母の言っていることは、すべて理解できた。そして、母の言葉に間違いはなかった。すべて正しかった。しかし、母の言葉には、何故僕がここにいたのか、学校にも行けず、家にも帰れず、ここに居なければならなかったのか、それを分かってくれる言葉が一つもなかった。ぼくが母に求めていたのは、傘を差し出すことではなく、一緒に濡れてくれることだった」である。我々は、彼の言葉をどのように受け止めたらよいのでしょうか。

ところで我々教師は、子ども達に良かれと思うことを日々教育指導として実践しています。しかし、子ども達の気持ちを顧みない大人の理屈(論理)だけの教育指導は、彼らからは今風に言えば「うざつてえな」としか、受け止められないのです。大切なのは、我々の思い(想い)よりも、それを子ども達がどのように受け止めたのかという視点です。子ども達の気持ちにとどかない言葉は無効です。その意味で、受容と共感、教育指導において不可欠だと思われまふ。

またその延長で、子ども達の悩みや問題に対して、「なんで、そんな風に考えたの(行動したの)！」と原因追究するよりも「それで、何をしたいの(したかったの)?」という問いかけで自分を見つめ直すよう促す方が、その後の指導(教育)につながり、得策だと考えます。前者の問いかけは、子ども達にとつては考え方を否定され責められる感覚が強くなるのではないのでしょうか。後者であれば、子ども達にその感覚が少なく、会話が続く確率が高くなると考えられます。「〇〇したかった」というような次の発言・反応が語られやすくなると思うのです。そうなれば、教師としては「そうならば、そのやり方ではなくて△△のやり方がいいんじゃない」といった、次の指導につながりやすくなると思います。子ども達にとつても指導を受け入れやすくなるのではないのでしょうか。

一方、悩みや問題解決に至るガイダンスは、出来るだけスモールステップで組むことが有効です。すなわち、子ども

も達は、何かをしようとした時に、その「やり方」が分からなくて動き出せないという事は多いのではないのでしょうか。そのような時、繰り返しになります。子ども達に「寄り添う」ことは大切です。しかし、それだけをしていても子ども達は、きつと動き出せないのかもしれないとも思います。彼ら自身に、先の見通しが立たないからです。私は、「寄りそう」の「そう」には、二つの漢字が当てはまると考えています。一つは、今も記した「添」を書く寄り添いです。これは、従来のカウンセリングが重視する「あるがままの子どもを受け入れる」という意味です。これも繰り返しのようです。私は教師や保護者のこのような態度が、子ども達の情緒の安定をもたらすこと、勇気づけに有効に機能することを承知しています。

しかしもう一つ、「沿」の字を用いることが可能であろうと考えます。これは、子ども自身に寄りそうというよりも、その子が有する問題に寄り沿う事を意味します。換言すれば、問題解決型の寄り沿いです。ここに、ガイダンス機能をフルに活用するという発想が出てきます。例えば、我々子ども達に「勉強しなさい」ということがあると思いませんか。しかし、我々自身がかつてそうだったように、言われた側の子ども達にしてみれば、「そんなことは、言われなくても分かっている」といった気持ちを抱きやすいと思われるます。子ども達が求めているのは、その勉強というのは、「何を、どこから、どのように、何を頼りに、やればいいのか」ということが多いのではないのでしょうか。そうであれば、

我々のすることは、「教科書を開いてみようか」、「一緒に」読んでみようか、「これを書き写してみようか」、「一緒に」この問題をやってみようか」などと、子ども達をガイドしていく方が有用ではないかと考えるのです。先に掲げた進路で悩む子ども達にとつても、具体的な情報提供や進路決定の手順と方法が示せることが功を奏します。これらは、やはりガイダンスです。

私は、修士課程は上越教育大学の旧障害児教育講座が出身です（一昨年約十五年ぶりに、母校に戻ってきたことになりました）。当時学んだ行動療法の考え方が、現在カウンセリングラーとして子ども達と関わる時に有効であると実感する事が多々あります。それは、抽象論で議論や指導・支援をしないということです。行動療法は、常に具体論を提示し子どもと向き合うのです。

さらに、教師はその免許状取得にあたり大学や大学院で「教える」ための術を教育されています。教師にとつて得意（必須）な分野は、教えるということです。これを活かさない手はありません。これからの学校教育現場では、その教師のガイダンス能力を活かしたカウンセリング（教育相談）が求められるのだと思います。

まとめて言い返すと、伝統的なカウンセリングでは、「沿う」とするな、教えようとするな、解ろうとせよ」との考えを重視してきました。それに対して、教育カウンセリングは、「沿して下さい。教えてください。ただし、解ろうとしながら」と考えます。駄目なものは駄目と直さないと、

教育は成り立ちません。分からないことは、考え方や方法を教えないと、子ども達は戸惑うだけだと思います。ただし、子ども達を「解ろうとしながら」です。

③ 集団活動を重視する

教育力ウンセリングの対象は、全ての子ども達です。これは、ある特定の問題行動を有する者だけが対象ではないという意味です。換言すれば、不登校などで学校に来ていない子どもにとつての目標は、学校に行く（行ける）ようになることでしょう。保健室や相談室にいる子ども達にとつての目標は、教室に入ることでしょう。通常、教室にいる子ども達も、いずれは卒業し次の段階に進み、社会に巣立っていきます。今掲げてきた、学校・教室・社会は、いずれも集団の場なのです。学校教育の目標が、子ども達の人格の完成・社会的自立（自律）に置く時、彼らに求められる能力の一つは集団への適応能力です。また、適応するだけではなく、その中で可能な限り自分の能力を発揮していける努力です。そう考えるならば、子ども達が学校にいる間に、その練習を促すことは意義があると考えられます。そこに、集団活動が効力を発揮します。教育力ウンセリングの分野では、集団心理教育として「構成的グループ・エンカウンター」、「対人関係ゲーム」、「(集団) ソーシャルスキル・トレーニング」、「ピア・サポート」などが開発されています。

手前味噌の話になり恐縮ですが、私は前任校(富山大学)在籍当時に七年間、単位制高校と当時在籍校附属小・中学校でスクールカウンセラーをしていました(今現在も、上越教育大学附属中学校のスクールカウンセラーです)。

前述の学校で先生方は、生徒相互の人間関係また感情交流の希薄さを意識しておられました。そこで、単位制高校では教育相談部とタイアップし、総合的な学習の時間を活用して正規の単元として通年のカリキュラムに盛り込んだ、「私と出会おう」という授業(一コマ九〇分×三〇時間)

を行いました。前期の半年は、構成的グループ・エンカウンター、後期その半年は(集団) ソーシャルスキルトレーニングでした。その結果、レポート提出率の増加と中途退学者の減少、という結果を得ることができたのです。一方、前任校の附属小・中学校ではいじめ予防の意味も込めて、保健委員会を活用したピア・サポート活動(灌充の流派に即した手法)を、やはり年間を通して実践してきました。その結果、昨今学校教育現場でよく用いられている「Q-Uテスト」において、学級を居心地よいと感じる『学級満足群』に位置する生徒が増加するとともに、生徒会の委員選出に際し、どの学年でも保健委員を希望する生徒が増加する結果を得ました。

ここでお伝えしたいことは、次の通りです。人間は、やはり温かな感情交流を媒介とした良好な人間関係の中で育つということです。

本稿のまとめー学力とは何かー

現在、生徒指導総合講座の橋本定男先生、林泰成先生、

白木みどり先生と私で進めている学内共同プロジェクト「人間性形成と人間関係づくりに関する教育実践学の構築」で、文部科学省の杉田洋審議官をお招きしたことがありました。その際の講演で、審議官が「塾と学校の根本的な違いは何か。それは、塾が個人の成績を伸ばすことを目的としているのに対し、学校は子ども達の「学び合い」による高まりをねらいとしている」と述べられたことが思い出されます。また、東京大学大学院教授の市川伸一先生が、(ある食事会の席で)「学力には、二つの種類があるんだ。一つは、学んだ結果としての学力。これは、基礎学力のことで、個人で伸ばせるもの。もう一つは、次を学ぶための意欲としての学力。これは、応用力のことで『機能的な学習*注』の場があつて身に付くもの。大切なのは、その機能的な学習の場では、必ず自分以外の他者が必要だということなんだ」と言われていたことを思い出します。

私の研究領域の視点から、本稿のテーマである「教育のゆくえ」ということに即していえば、我が国の学校教育の根底を支える土台は教師・教師と子ども・子ども同士の良好で良質な人間関係であろうということです。そして、我が国の学校教育における出口も良好で良質な人間関係を構

築・維持できる能力を培うことであるといえるのではないでしょう。このような考え方に立つ時、教育カウンセリング心理学(教育相談学)は、この先の学校教育に少なからず寄与できる(有効である)と考えています。

最後に、本稿で私は自分の研究領域を「教育カウンセリング心理学(学校教育相談学)」と記してきました。その両者は、共にカウンセリング心理学を重視しています。しかしその違いとして、最終的にカウンセリングは子ども達の自己決定を重視し、教育相談では教師の指導が入るところが特徴です。

*注 機能的な学習¹⁾もとは、ジョン・デューイにより提唱された教育用語。子ども達が、与えられた題材を基に、何故こうなるのだろう、次はどうなるのだろう、違うものでやったらどうなるのだろう、自分にとって、これはどのように活かせるのだろう、などと思考を巡らせること。また、カウンセリング心理学を学問体系としてまとめたカール・ロジャーズは、この言葉を受けて「教師が子ども達に最低限してはならないこと。それは、圧力を加えて関わることである。圧力を加えられると、子ども達は恐怖で緊張しストレスを溜める。すると、授業の中身など身に付くわけがない。子ども達は、いかにその時間をやり過(こす)かという、ごまかしの方法(だけ)を身に付けていく。ましてやデューイのいう機能的学習など、起こすわけがない」と述べている。

〔文 献〕

稲垣応顕・中嶺裕子(二〇〇七)
教育カウンセリングと臨床心理学の対話 文化書房博文社
松井理納・稲垣応顕(二〇〇九)
集団を育むピア・サポート 文化書房博文社